

王屋山の伏虎説話——孫思邈伝説の成立をめぐる

山下 一夫

1. はじめに

河南省済源市の西北約 45km の位地にある王屋山は、一般には「愚公移山」の舞台として知られている^{*1}。特に、毛沢東がこの故事を反帝国主義・反封建主義の闘争の比喩として用いたため、現在では特にこの部分が強調された観光名所となっている。

しかしもちろん、王屋山は「愚公移山」だけではない。他にもこの地域には「女媧補天」^{*2}や「黄帝祈天戰蚩尤」^{*3}など、天地の創世に関わる説話が分布しており、「済源邵原創世神話群」として省級非物質文化遺産に登録されている。また唐代に司馬承禎が全国の洞天福地の首位に君臨する「第一洞天」としたこともあって、「道教聖地」としての伝説・故事も多数流传している。

その中の一つに、「孫思邈伏虎」という説話がある。これは、一般には医書『千金方』^{*4}の著者として知られる唐代の道士・孫思邈が、獐猛な虎の怪我を治し、以後自らの乗り物としたというものである^{*5}。

唐の高宗の時のこと。名医の孫思邈が、ロバに乗って王屋山まで診療にやって来た。孫思邈は世間で「薬王」と称えられていただけでなく、唐代の著名な道士であった。かれは晩年に太行山から王屋山に移り、庵を結んで翠微庵と名付け、薬の材料を採取しながら、困っている人々を助けた。ある日、山に入ってすぐ、斜面の至る所に様々な薬の材料があるのを見つけて、たいそう喜び、ロバを大きな木に繋いで探って回った。ふた時ほど過ぎたころ、集めた薬の材料をロバに背負わせようとすると、ロバの姿は見えず、かわりに大きな虎が木のそばで寝そべっていた。かれは驚いてゆっくり後ずさりしようとしたが、虎は凶暴なそぶりは無く、口から血を流して、眼に涙を浮かべており、痛みを訴えてきているかのようにだった。薬王は医者としての本能から、数歩前に出て言った。「虎よ、私は医者だ。お前が傷を診て欲しいのなら、尻尾を三回振りなさい。怪我をしていないのなら、お互いの領分は侵さずにくとしようではないか。」虎は目の前に来た人間が医者だと知って、すぐさま尻尾を三回振り、口を開けて血が溢れている様子を見せた。よく見ると、何と虎の喉に動物の骨が1本引っかかっていたので、薬王は手を伸ばして取り除いてやった。すると虎は腰を伸ばし、何度も尻尾を振って感謝の気持ちを表した。その時、薬王はロバを繋げたはずの木の下にロバの頭と尻尾が転がっているのを見つけ、虎が食べてしまったことを知った。かれは怒って言った。「虎よ、お前は私のロバを食

注1…「愚公移山」の出典は『列子』巻五「湯問」。また現代の民間故事としては「愚公盤山」、『中国民間故事集成・河南卷』（中国 ISBN 中心、2001 年）、222 頁を参照。

注2…金榮華「女媧神話的産地印証——談河南省済源市邵原鎮小溝背的地形地貌」、『王屋山道学研究』2009 年第1期、17 頁—18 頁。

注3…李菊月「蚩尤文化邵州説」、『王屋山道学研究』2008 年第1期、35 頁—38 頁。

注4…現在一般に『千金方』の名で流布しているのは、北宋の治平三（1066）年に校正医書局が校定した『備急千金要方』三十巻とその補編『千金翼方』三十巻である。また『正統道蔵』太平部（SN1163）には前者を九十三巻に分けたものが収録されている。『千金方』の版本や内容については複雑な問題があるが、本稿ではあまり踏み込まない。雷自申『孫思邈千金方研究』（陝西科学技術出版社、1996 年）、641 頁—660 頁を参照。

注5…姚景強「在孫思邈走過的地方」、『王屋山道学研究』2009 年第1期、45

注 6…说是唐代高宗年间，名医孙思邈，骑着毛驴来王屋山行医。孙思邈不仅世称“药王”，而且还是唐代著名道士。他晚年历太行而王屋，结庐王屋山翠微庵，采药行医，济世活人。这天，他刚一进山，就看到山坡上遍地都是各种各样的药材，煞是欢喜，就把毛驴拴在一棵大树上采药去了。两个时辰过后，当他把采好的药材收拢停当，去牵毛驴驮药时，毛驴却不见了。只见一只大老虎卧在大树旁，药王见状惊恐万分，连连后退。可老虎一点儿凶猛的样子都没有，只见它口流鲜血，眼中流露出痛苦哀求的神色。出于医生的本能，药王上前两步说：“老虎啊老虎，我乃行医之人，你若让我给你看病，就把尾巴摇晃三下。无病，咱井水不犯河水。”老虎一听眼前的来人是个医生，赶紧晃了三下尾巴，还张开了鲜血直流的大嘴。药王上前仔细一看，原来老虎的咽喉部位卡着一根兽骨，便伸手把兽骨取了出来。老虎伸了伸腰，不断地摇晃着尾巴，以示谢恩。这时，药王才发现那棵拴驴的大树下，有个驴头和尾巴。一看便知，是老虎把驴给吃掉了。他十分生气地说：“老虎啊，你不该吃掉我的毛驴。驴没了，我用啥驮药为民治病呀？老夫我体力不支，走累了没有坐骑怎么能行啊？”这时，伏在地上的老虎羞愧万分地爬到药王跟前，示意让他骑在自己背上。药王会意，提着采来的药材，骑在虎背上，朝王屋山深处行医采药去

べてはいけなかった。口バがいなければ、私はどうやって薬を背負って人々の病気を治しに行くというのだ。私は年老いて体力が衰えているのに、歩き疲れた時に乗り物が無かったら何もできないのだぞ。」すると、地面に伏していた虎が恥ずかしそうに薬王の前に進み出て、かれに自分の背中に乗るように合図してきた。薬王は虎の意図を理解し、採ってきた薬の材料を持って虎の上に跨がり、診療と薬の採取のために王屋山の奥へと入っていった。後になって、人々はここに薬王伏虎廟を建て、「虎嶺」の名前も知られるようになった*⁶。

ここで言及されている「虎嶺」については、新編地方志『王屋山志』で以下のように記されている*⁷。

虎嶺 秦嶺の東にある。秦嶺の主峰から嶺沿いに 3km 南に行ったところに狭い関があり、山の門がまるで天まで連なっているようである。ここが「虎嶺関」で、天然のものとしては王屋山に入る最初の入口である。伝えられているところによると、唐代の著名な道士で医薬の専門家である孫思邈が、晩年に薬を採取し診療を行うため王屋山に入った際、途中ここを通り、美しい色をした大きな虎が道に寝そべっているのに出くわした。孫思邈が見ると、虎は怪我をしていたので、自らの医術で虎を治した。虎は傷が癒えた後、孫思邈を乗せて王屋山を駆け巡ったという。それからこの嶺は「虎嶺」と呼ばれるようになったのだ*⁸。

また「薬王伏虎廟」は、『王屋山志』には「孫真人墳」として記されている*⁹。

孫真人墳 孫思邈の墓のこと。大店河の西岸の孫真人村の西北の廟嶺の上にある。墓は南面しており、円形で上部は平らになっていて、高さは 0.7m、上部の直径は 9m、敷地は 63m²である。平らな上部の上にはもともと磚券があり、丸く土を盛っていたが、文革中に破壊された。墓の前には孫真人廟がある。創建年代は不明で、現在のものは清の道光二十二年(1842 年)の再建である。階段は 40 段あり、四合院の作りで、廟はひっそりとした佇まいとなっている*¹⁰。

図 1 は、筆者が王屋山道教施設を調査した際に撮影した、現在の孫真人墳の様子である*¹¹。墓石は 1997 年に作り直されたものである。

図 2 は、墓の前面にある薬王廟内に安置されている孫思邈像である。左の足許に小さな虎が伏しているのが見える。

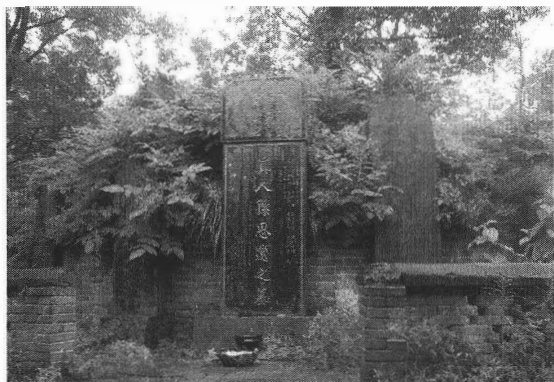


図1 王屋山藥王廟孫真人墳（左上）

図2 王屋山藥王廟孫思邈像（右上）

図3 王屋山陽台宮孫思邈像（左）

図4 陝西省宝鶏市金台觀孫思邈像（左下）



また図3は、王屋山の陽台宮にある孫思邈像である^{*12}。こちらでは孫思邈が大きな虎に乗っている。

さらに図4は、陝西省宝鶏市金台觀の孫思邈像である^{*13}。やはり孫思邈が大きな虎に乗っており、ここからこの形象が王屋山だけでなく、他地域でも行

了。后来，人们在此盖了一座药王伏虎庙，虎岭的名字也就流传开了。

注7…济源市地方志辦公室『王屋山志』（中州古籍出版社，1996年）、65頁。

注8…虎岭 在秦岭东。自秦岭主峰发脉，南下3公里处有关隘，如山门中天，是为“虎岭关”，是进入王屋山的第一道天然门户。相传唐代著名道士和医药学家孙思邈晚年进王屋山采药行医，途经此地，遇一斑斓大虎横卧于道，孙视之，乃是一只病虎，于是便利用自己的医术为虎治病。虎的病被治好，便驮着孙思邈遍游王屋山。从此，这岭便叫“虎岭”。

注9…『王屋山志』、137頁。

注10…孙真人坟 即孙思邈墓。位于大店河西岸孙真

人村西北庙岭上。坟南向，圆形，平顶，高0.7米，顶部直径9米，占地63平方米。平顶上原有砖券圆顶封土，“文革”中拆毁。坟前有孙真人庙，创建年代失考。清道光二十二年（1842年）重建，踏跺40级，四合院落，庙貌幽谧。

注11…調査は土屋昌明・大形徹および筆者の3名で、2011年8月に実施した。写真はこの時のものである。なお王屋山調査の経緯については、土屋昌明「第一洞天王屋山洞の陽台観と紫微宮の現況」（『洞天福地研究』第三号、2012年、35頁—54頁）を参照。

注12…2011年8月に筆者が撮影。

注13…野口鐵郎・坂出祥伸・福井文雅・山田利明編『道教事典』（平河出版社、1994年）、355頁。撮影は蜂屋邦夫氏による。

注14…百花洲文芸出版社、1996年。

注15…山崎宏「初唐の道士孫思邈について」、『立正大学文学部論叢』50号（立正大学文学部、1974年）、19頁—40頁。樊光春「孫思邈对道教養生学的貢獻」、『西北道教史』（商務印書館、2010年）296頁—306頁。

注16…唐・劉肅撰／許德楠・李鼎霞点校『大唐新語』（中華書局、1984年）、155頁。

われていることが解る。

また祁連休・馮志華編『道教伝説大観』には、浙江省の説話として「孫真人伏虎」という以下のような説話が収録されている^{*14}。

唐代、洞霄宮梅鹿庵に孫思邈が住んでいた。近くには人食い虎がいるという噂があった。ある時、孫思邈の前に虎が現れた。虎は老婦人を食べた際、かんざしが喉に引っかかってしまい、今にも死にそうになっていた。孫思邈がかんざしを取り除くと、虎は感謝して、以後孫思邈の乗り物になった。

ここではロバが老婦人に変わっているが、話の骨格は同一であり、ここから「孫思邈伏虎」の説話は他地域にも分布していることが解る。

孫思邈については、すでに山崎宏や樊光春による詳細な研究があるが^{*15}、こうした「孫思邈伏虎」説話や、造像に見られる孫思邈と虎との関わりについては言及されていない。また王屋山の孫思邈廟について分析した研究も、管見の及んだ限りでは存在しないようである。そこで本論ではこの問題について検討を行うとともに、そこから近世以降における道教聖地・王屋山の性質について考察を加えてみたいと思う。

2. 竜との関わり

孫思邈の最初期の伝記としては、唐・劉肅の『大唐新語』巻十「隠逸」が挙げられる^{*16}。

孫思邈は華原の人である。七歳から学問を修め、一日に千言を誦んじた。成長すると『莊子』や『老子』、さらに百家の思想を語った。北周の宣帝の時、王室が乱れていたために、太白山に隠棲した。（そのころ後に）隋の文帝（となる楊堅）が輔政となっており、国子博士に徴用したが応じなかった。常に人々に以下のように言っていた。「今から五十年後に聖人が現れる。私はその方を助け、生きている人々を救おうと思う。」（その後）唐の太宗が都に召し出した際、その容貌がたいへん若いのを見て感嘆して言った。「有道の方を尊ぶべき理由がよく解った。（始皇帝の時の不老長生の仙人である）羨門高のような人物の話は、決して嘘ではなかったのですね。」そして孫思邈に爵位を授けようとしたが、固辞して受けなかった。さらに高宗も孫思邈を召し出して諫議大夫に任じようとしたが、やはり固辞した。この時すでに九十歳を超えていたが、目も耳も衰えておらず、天文や養生の術にたいへん明るかった。…（略）…永徽年間初めに卒した。遺言によって薄葬とし、副葬品や家畜の生贄などの供物は設けなかった。一ヶ月が過

ぎても顔色は変わらず、遺体を入れた棺は空っぽのようだった。当時の人々は屍解仙になったのではないかと疑った^{*17}。

孫思邈は「華原の人」、すなわち現在で言えば陝西省銅川市耀州区の出身で、その活動拠点も陝西省の長安や太白山であり、王屋山についての言及は無い。それは上記資料に基づいて作成された『旧唐書』巻一百九十一「方伎」や、『新唐書』巻一百九十六「隱逸」などに収められている孫思邈伝も同様である^{*18}。

なお孫思邈は初めに紹介した王屋山の説話で「薬王」と呼ばれていたように、現在中華圏では一般に医者としてのイメージが強いが、上記資料を見るとそうではなく、唐代にはむしろ長生不老の道士のイメージが強かったようである。没後 180 年ほど後に成立した唐・段成式の『酉陽雜俎』前集巻二「玉格」に、比較的早い段階における孫思邈伝説が載せられているが、これも『千金方』の薬方の由来譚でありながら、力点が置かれているのはやはりかれの道士としての側面である^{*19}。

孫思邈はかつて終南山に隠棲した時、宣律和尚と交際しており、行き来するたびに互いの教義を学びあった。当時ひどい日照りがあり、西域の僧が昆明池で壇を作って雨乞いをしたいと言うので、有司に詔を下して香灯を供えさせた。しかし七日経ち、かえって池の水位が七尺も下がってしまった。ある夜、老人が宣律和尚のところを訪れ、助けを求めて来た。「私は昆明池の竜です。長い間雨が降っていないのは私のせいではないのに、(池を枯れさせて私を捉え)私の脳で薬を作るため、胡僧が雨乞いをすると行って天子様を欺いているのです。このままでは私は死んでしまいます。どうか和尚様の法力のご加護をお願いします。」宣律和尚は断って言った。「拙僧は戒律を保持しているだけなので、孫先生に頼むと良い。」そこで老人は孫思邈の石室に行って助けを求めた。孫思邈は言った。「昆明の竜宮には仙方三十首があることを知っている。私に伝授してくれると言うなら、お前を助けてやろう。」老人は言った。「この薬方は上帝がみだりに伝えてはならないとしたものですが、今は火急の時なので仕方ありません。」竜はしばらくして薬方を持って来た。孫思邈は言った。「お前は帰りなさい。胡僧のことは心配しなくて良い。」それから池の水は急に増水し、数日で岸まで溢れた。胡僧は恥じ入って死んだ。^{*20}

隠棲場所が太白山ではなく終南山となっているのは、同所に庵を結んだ宣律和尚、すなわち唐の道宣(596 年—667 年)に合わせたものと思われる。また、ここで孫思邈が救っているのが虎ではなく竜であることも注意される。初期の孫思邈伝説はいずれも竜との関わりを示すものばかりなのである。唐・李冗の

注 17…孫思邈、華原人、七歲就學、日諷千言。及長、善譚《莊》、《老》、百家之說。周宣帝時、以王室多故、隱於太白山。隋文帝輔政、徵為國子博士、不就。常謂人曰：「過是五十年、當有聖人出、吾方助之、以濟生人。」太宗召詣京師、嗟其顏貌甚少、謂之曰：「故知有道者誠可尊重、羨門之徒、豈虛也哉。」將授之以爵位、固辭不受。高宗召拜諫議大夫、又固辭。時年九十餘、而視聽不衰、頗明推步導養之術。…(略)…永徽初卒、遺令薄葬、不設明器牲牢之奠。月餘顔色不變、舉屍入棺、如空焉。時人疑其屍解矣。

注 18…正史孫思邈伝と先行資料との関係については複雑な問題があるが、本論では立ち入らない。樊園『『旧唐書・孫思邈伝』箋証』(『陝西中医學院學報』、陝西中医學院、1982 年 3 期、54 頁—57 頁)、嚴振海「孫思邈三題」(『中医藥文化』、上海中医藥雜誌社、1985 年 4 期、34 頁—36 頁)などを参照。

注 19…唐・段成式撰／方南生点校『酉陽雜俎』(中華書局、1981 年)、19 頁。

注 20…孫思邈嘗隱終南山、與宣律和尚相接、每來往互參宗旨。時大旱、西域僧請於昆明池結壇祈雨、詔有司備香燈、凡七日、縮水數尺。忽有老人夜詣宣律和尚求救、曰：「弟子昆明池龍也。無雨久、匪由弟子。胡僧利弟子腦、將爲藥、欺天

子言祈雨，命在旦夕，乞和尚法力加護。」宣公辭曰：「貧道持律而已，可求孫先生。」老人因至思邈石室求救。孫謂曰：「我知昆明龍宮有仙方三十首，爾傳與予，予將救汝。」老人曰：「此方上帝不許妄傳，今急矣，固無所吝。」有頃，捧方而至。孫曰：「爾第還，無慮胡僧也。」自是池水忽漲，數日溢岸，胡僧羞恚而死。

注 21…唐・李亢撰、唐・張讀撰／張永欽、候志明点校『独異志 宣室志』（中華書局、1983 年）、11 頁—12 頁。また、宋・李昉等編『太平広記』巻四百二十に引く『神仙感遇伝』にこの物語の異文がある（中華書局、1961 年、3419 頁—3420 頁）。なお『正統道蔵』には五代・杜光庭撰の『神仙感遇伝』があるが（洞玄部記伝類、SN592）、本編は収録されていない。

注 22…原文は「人王経」。『仏説仁王般若波羅蜜経』（大正蔵 No. 0245）、あるいは『仁王護国般若波羅蜜多経』（大正蔵 No. 0246）のいわゆる『仁王経』を指すものと思われる。「人王経」という表記は『痴絶道冲禅師語録』巻上（正統蔵 No. 1376）など幾つか例があり、仁と人の音通に加え、護国經典としての内容のため混同されたのだろう。

注 23…唐天后朝、處士孫思邈居於嵩山修道。時大旱，有敕選洛陽德行僧徒數千百人於天宮寺講《人王經》以

『独異志』巻上「孫思邈千金方」には以下のようにある^{*21}。

唐の則天武後の時のこと。處士の孫思邈が嵩山に住んで修行をしていた。当時ひどい日照りがあり、勅命で選ばれた洛陽の德行僧數千百人が天宮寺で『仁王経』^{*22}を唱えて雨乞いをした。人々の中に二人の老人がおり、髪も眉も真っ白だった。講僧の曇林が二人の老人のもとに人を遣って言った。「終わったら寺に立ち寄ってよいぞ。」二人の老人が寺にやって来たので、どこから来たのかを聞くと、二人の老人は言った。「私どもは伊水と洛水の竜です。こちらに伺うために、このような姿で参りました。」曇林は言った。「経を読んで雨乞いしていることはご存じですか。」答えて言った。「もちろん知っていますが、天の詔がなければ雨を降らすことはできません。私たちの勝手にはできないのです。」曇林は言った。「ならばどうすればよいだろうか。」二人の老人は言った。「道を修めた者が天に上奏文を奉れば、雨を降らすことができます。」そこで曇林は朝廷にその旨報告した。則天武后が使いを嵩山に遣って孫思邈を召し出し、宮中で（天に対して）緊急の上奏文を出させた。するとその日の夜に大雨が降った。孫思邈もなぜなのか自分では解らず、宮中から戻ってきた時に曇林に言った。「私が五十年間修行をしてきたことを、天は知らないはずだが、どうしてだろうか。」そこで二人の老人に聞いてもらった。二人の老人は答えた。「人々を助けているものが、神仙となれないはずはありません。」そこで孫思邈は青城山に帰って、『千金方』三十巻を著した。完成すると白日昇天した。^{*23}

ここでもやはり、道士としての孫思邈の形象が中心である。なお、天の詔を動かすことができる孫思邈の能力は、降雨を司ってはいても詔が無いと使えない竜の能力よりも優れているわけで、いわば孫思邈は竜よりも上位の存在といふことになるが、これは後述する孫思邈の「降竜」のイメージに連なっていくものとなる。

また、竜以外に孫思邈の能力が仏僧の法力を上回っていることも重要である。説話は神仙イメージの孫思邈を仏僧と対比させることで、道教の仏教に対する優位も説くものとなっている。嵩山や青城山といった、当時の道教が盛んだった場所が出てきているが、これらは実際に孫思邈がそこにいたというわけではなく、やはりかれの道士としての側面を強調するためのものだろう。

しかし一方で、孫思邈が仏教を尊崇したとする記事も存在する。唐の法藏の『華嚴経伝記』巻五^{*24}に以下のようにある。

處士の孫思邈は、雍州永安の人である。（中略）いつも医術によって人を

助け、訪れる者には治療を行った。修道者にも俗人にも、常に『華嚴經』七百五十部あまりを書写することを薦めた。(中略)古今の名医のすばらしい術を纏めて『孫氏千金方』六十巻とし、困った時に役立てるためのものとして、高祖に進上した。高祖は褒美に絹一束を与え、官職に就けようとしたが、孫思邈は固辞した。宮中に召された時、一月あまり禁中に置かれ、高宗に大変気に入られた。帝は孫思邈に聞いた。「どのような功德を修めるのが最もよいのだろうか。」孫思邈は答えて言った。「陛下は『華嚴經』を読むべきです。」帝が理由を尋ねると、孫思邈は言った。「宝の器にはそれ相応の蓋が似つかわしいように、陛下のような大人物は大典を読むべきです。」帝は言った。「大きな經典というのなら、最近、玄奘法師が訳した『大般若經』六百巻の方が大きいのではないか。」孫思邈は言った。「般若空宗は『華嚴經』の中に含まれ、そこから枝分かれしたものに過ぎません。」帝は深くこれを信じた。永淳年間の前に卒した。孫思邈には子がいて、行真と言い、またの名を元一と言った。端正で立派な人物である上に博覧強記で、仏法の要を深く理解し、回向一乗に努め、父の遺風を継いで『華嚴經』を生業とし、当時名を知られた。まことに優れた信士であった^{*25}。

孫思邈のことを「雍州永安の人」と言っているが、これは現在の陝西省銅川市耀州区のことなので、先に見た資料で言う「華原の人」と実質的に同じである。この資料では、孫思邈のことも「医術によって人を助け、訪れる者には治療を行った」として、医者としての側面を強調し、さらに『華嚴經』を賞揚する仏教者としている。

法蔵(643～712)は則天武后の庇護のもとで華嚴宗を喧伝した人物なので、上の孫思邈の描写もそうした立場に基づいた創作である可能性は高い。ただ、普通に考えると、道士であることが知れわたっている人物に、仏教を賞揚する言説を持たせても説得力を持たないはずである。にもかかわらずこうした話が作られたということは、これが当時ある程度の説得力を以て提示できる素地が存在したと見るべきであろう。その時に鍵となるのは孫思邈の「医術」である。孫思邈は確かに道士だったし、また『千金方』を支える身体観が「道教的」なのも事実だが^{*26}、一方で医術そのものは、道教という枠組から離れて一般的に評価され得る分野である。それは逆に、孫思邈の「高名な医者」としての側面が強調されると、道士としての帰属は曖昧になり得るということも意味している。また、先に見たように『大唐新語』では『莊子』や『老子』、さらに百家の思想を語ったとあるように、孫思邈はもともとさまざまな思想を接受しており、そこに仏教が含まれていてもおかしくはない^{*27}。仏教側からすれば、こうした点を利用して自らの喧伝材料とする余地があったし、またそのメリットもあったということなのだろう。

祈雨澤。有二老人在罽中，髮眉皓白。講僧曇林遣人謂二老人曰：「罷後可一過院。」既至，問其所來，二老人曰：「某伊洛二水龍也。聞至言當得改化。」林曰：「講經祈雨，二聖知之乎。」答曰：「安得不知，然兩者須天符乃能致之，居常何敢自施也。」林曰：「為之奈何。」二老曰：「有修道人以章疏聞天，因而滂沱，其可力為之。」林乃入啟。則天發使嵩陽召思邈。內殿飛章，其夕天雨大降，思邈亦不自明。退詣講席，語林曰：「吾修心五十年，不為天知，何也。」因請問二老。二老答曰：「非利濟生人，豈得昇仙。」於是思邈歸蜀青城山，撰《千金方》三十卷，既成，而白日冲天。

注 24…大正蔵 No. 2073。

注 25…處士孫思邈，雍州永安人也。…隨時利物，專以醫方，為事有來請問，無不拯療。常勸道俗諸人寫《華嚴經》七百五十餘部。…嘗撰古今名醫妙術，號曰《孫氏千金方》凡六十卷，備窮時用，進上高祖。高祖賞以束帛，將授榮班，苦辭不受。時召入內，旬月不出待詔禁中，甚見優寵。帝嘗縱容顧問：「修何功德為最佳耶。」邈對曰：「天皇何不讀《華嚴經》。」帝問何故，邈曰：「天皇大人，須讀大典，譬如寶器函蓋宜相稱耳。」帝曰：「若論大經，近者玄奘法師所譯《大般若》凡六百卷，寧不大乎。」邈曰：「般若空宗，乃《華嚴經》中，枝條出矣。」帝深信之。永淳前卒。邈有子，曰行真，又名元一。貞正該博，強記洽聞，深思法

要、廻向一乘、繼習父風、亦以《華嚴》為業、知名當代。實為高信士焉。

注 26…『西北道教史』298 頁—301 頁を参照。

注 27…実際、『旧唐書』ではこの部分に「兼好釋典(兼ねて釈典を好む)」という文言を付加しているが、ただこれは法蔵の『華嚴經伝記』の記述自体の影響による可能性もあるだろう。

注 28…『正統道蔵』洞真部記伝類、SN295。

注 29…偶出路行、見人欲殺小青蛇、已傷血出、思邈求其人、脱衣贖而救之。以藥封裹、放於草間。後月餘復出行、見一白衣少年、僕馬甚盛、下馬迎拜思邈、謝言：「小弟蒙道者所救、父母欲相見。」而思邈每以藥救人極廣、聞之不以為意。少年復懇拜請、以別馬載思邈、偕行如飛。到一城郭、花木正春、景色和媚、門庭煥赫、人物繁盛、儼若王者之居。少年延思邈入、見一人端美、白恰帽、絳衣、侍從甚眾、欣喜相接、謝思邈曰：「深思道者、固遣兒子相迎。前者小兒偶出、忽為愚人所傷、賴脱衣贖救、獲全其命。此中血屬非少、共感再生之恩。今面道者、榮幸足矣。」俄頃、延思邈入、若宮闈內、見中年女子領一青衣小兒出、再三拜謝思邈言：「此兒癡駄、為人傷損、賴救免害。」思邈省記嘗救殺青蛇、即訝此何所也。又見左右皆閨人宮妓、呼恰帽為君王、呼女子為妃子、思

實際、孫思邈の伝記を『旧唐書』では「方伎」に、『新唐書』では「隱逸」に入れるなど、それぞれで扱いが異なっているのは、その帰属が揺れていたことを示しているし、現在「藥王」として尊崇を受けているのも、後世になって道士としての記憶が薄れた結果だといえるだろう。

3. 竜から虎へ

五代・沈汾の『続仙伝』巻中「孫思邈」*²⁸ にも、孫思邈と竜との関わりを示す以下のような説話が載っている。

(孫思邈が) ある日道を歩いていたら、ある人が小さい青蛇を殺そうとしていて、すでに傷から血も出ていた。そこで孫思邈は着ていた服を脱いで蛇と引き替え、助けてあげた。そして薬を塗って傷口を塞ぎ、草むらの中に放してやった。一ヶ月あまり後、再び外出した時に、馬を連れ白い服を着た少年に出会った。少年が馬から下りて孫思邈に挨拶をし、感謝して言った。「私は先生に助けていただいた者です。両親がぜひお会いしたいと申しております。」孫思邈はたくさんの人々を薬で救ってきたので、聞いてもいったい誰なのか解らなかった。少年は何度も懇願し、別の馬に孫思邈を乗せ飛ぶように走った。城郭に着くと、新春の花が咲いていて、美しい景色が広がっていた。門庭は輝くばかりで、多くの人々が出入りしていて、まるで王者の居所のようであった。少年が孫思邈を中に通すと、赤い服を着て白い恰帽を被った人物が、多くの下僕を従えて現れ、にこやかに挨拶して孫思邈に感謝して言った。「道を修めた方だと言うので、御無礼の無いようわが子を迎えにやりました。以前わが子が外で愚か者に傷つけられた時、服を脱いで贖い、助けていただいたことを、ここにいる家族たちはみなご恩に感じております。今日お会いすることができて誠に光栄です。」中に招き入れられるとまるで宮殿のようだった。すると中年の女性が青い服を着た子どもと一緒に出てきて、何度も孫思邈にお礼を言った。「人に傷つけられていたこの子をよくぞ助けて下さいました。」孫思邈は殺されそうになっていた青蛇を助けたことを忘れていたため、いったい何のことだろうかと訝しんだ。まわりはみな王侯や宮女のような出で立ちで、恰帽を被った人物を「君王様」と呼び、女性を「お妃様」と呼んでいた。孫思邈が不思議に思っまわりの人々に聞くと、「ここは涇陽水府です」と答えた。恰帽の人物が臣下に命じて酒やご馳走、舞妓などを準備させ、孫思邈をもてなそうとしたが、孫思邈は辟穀・服氣を理由に断り、酒を飲むだけにした。三日が経ち、孫思邈に欲しいものを聞いてきたので、「山に住んで道を楽しみ、真を思い気を鍊っております。眼で窺うことはでき

ても、心はもとより無欲です」と答え、上等の絹や金銀財宝などは固辞して受け取らなかった。「道を修めた方がこのようなものはお気に召さないのなら、何を贈って報いたらよいだろう。」そう言って、竜宮で分けてもらった薬方三十首を子どもに取って来させ、孫思邈に渡した。「あなたは誠に道を修めた方だ。これでどうか世間の人々を救って下さい。」そう言って下人に命じて孫思邈を馬に乗せ、山に帰らせた。孫思邈は不思議に思い、持ち帰った薬方を試したところ、いずれもすばらしい効き目だった。後に『千金方』三十巻を著した際、竜宮の薬方をその中に収録した^{*29}。

この話は、宋代の『雲笈七籤』巻百十三下「孫思邈」^{*30}、元の趙道一『歴世真仙体道通鑑』巻二十九「孫思邈」^{*31}、明代の『列仙全伝』巻五「孫思邈」^{*32}にも収録されており、ある時期までは孫思邈説話の定番だったと思われる。この話も『酉陽雜俎』と同じく『千金方』の由来話で、やはり修道者としての孫思邈の性質を描きながらも、中心となっているのは「傷ついていた竜の治療をする」という医者としての側面である。また竜が虎に変われば「孫思邈伏虎」の話にもなり得るわけで、この説話はいわば竜から虎への橋渡しの存在と言える。

孫思邈と虎の関わりの初出は、管見の及んだ限りでは、北宋の元豊年間(1078年～1085年)に王瓛考が撰した「孫真人祠記」^{*33}の中の以下の部分である。

左に童が侍り、右に虎が伏しているのが、真人の新堂である^{*34}。

「孫真人祠記」は、銅川市耀州区の孫思邈の旧宅に建てられた孫真人祠の碑文で、安置されている孫思邈の神像の右側に虎が配されていることを記しているが、これは現在の王屋山の孫思邈廟の形と同じである。こうした造像製作の背景には、この時点で孫思邈にはすでに「虎を従えている」という性質が存在していると考えるのが自然だろう。

また、やはりこの孫真人祠にある元の憲宗元年(1256年)重刻の「太宗賜孫真人頌」碑には以下のように記されている^{*35}。

道を切り拓いた、その名の轟く大医。三人の聖人を扶け、四時を調和する。竜を降し虎を伏し、弱者を救い死に瀕する者を助ける。偉大にして堂々たる、百代の師。^{*36}

碑文は重刻なので、成立時期は元の憲宗の時より遡るだろうが、しかし先に見た「孫真人祠記」でこの「太宗賜孫真人頌」の内容に言及されていないのは不自然である。おそらく唐の太宗の真作ではなく、両宋の間に作られたものだ

邈心異之、潜問左右、曰：「此涇陽水府也。」恰帽乃命賓寮設酒饌妓樂以宴思邈，辭以辟穀服氣，唯飲酒耳。留連三日，問思邈所欲。對曰：「居山樂道，思真鍊神，目雖所窺，心固無欲。」乃以輕綃珠金贈於思邈，堅辭不受。曰：「道者不以此為意耶。何以相報。」遂命其子取龍宮所頒藥方三十首與思邈，謂曰：「此真道者，可以濟世救人。」俄復命僕馬送思邈歸山。深自為異，歷試諸方，皆若神效。後著《千金方》三十卷，散龍宮之方在其內。

注 30…『正統道藏』太玄部、SN1032。

注 31…『正統道藏』洞真部記伝類、SN296。

注 32…『中国古代版画叢刊』（上海古籍出版社、1988年）所收鄭振鐸旧藏萬曆二十八年原刻白棉紙初印本影印本。

注 33…陳垣編纂『道家金石略』（文物出版社、1988年）、288頁。なお『統通志』巻百六十八には「重刻孫真人祠記 宋王瓛撰 米孝思跋 正書 大定九年耀州」と著録されている。大定九年は1170年にあたる。

注 34…左童侍而右虎伏者、真人之新堂也。

注 35…『道家金石略』、56頁。清・雍正十三年序本『陝西通志』巻九十一「芸文六」に引く唐太宗の「賜

華原隱士孫思邈頌」も同文。また王明皋「太宗与孫思邈」(『華夏文化』1996年3期、17頁)はこの碑文の調査報告が含まれる。

注 36…開鑿徑路，名奎大醫。羽翼三聖，調和四時。降龍伏虎，拯衰救危。巍巍堂堂，百代之師。

注 37…陳清香「降龍伏虎羅漢圖像源流考」、『羅漢圖像研究』(文津出版社、1995年)、317頁—348頁。胡万川「降龍羅漢与伏虎羅漢——從『二十四尊得道羅漢傳』說起」、『真実与想像——神話伝説探微』(国立清華大学出版社、2004年)、203頁—236頁。

ろうが、ここで問題となるのは「龍を降し虎を伏」す、すなわち「降龍伏虎」という表現である。

前章で検討してきた説話は、いずれも孫思邈が龍より上位に立っているのを、これを発展的に捉えれば「龍を降」している、と取ることはできるし、また「孫真人祠記」によって宋代に「虎を伏」した形象が出現していることも確認できる。ただ、両者がセットで表現されているのは、当時形成されていた「降龍伏虎」の聖人イメージが孫思邈に流れ込んだ結果だと考えられる。

この「降龍伏虎」の問題については、すでに陳清香および胡万川の詳細な研究があり^{*37}、両者に基づいてその形成過程を整理すると、おおむね以下の通りとなる。

(一) 中国は古代から水害と虎害が多く、両者は最も畏怖すべき対象であったため、これを駆除できる「斬蛟殺虎」が英雄の条件であった。

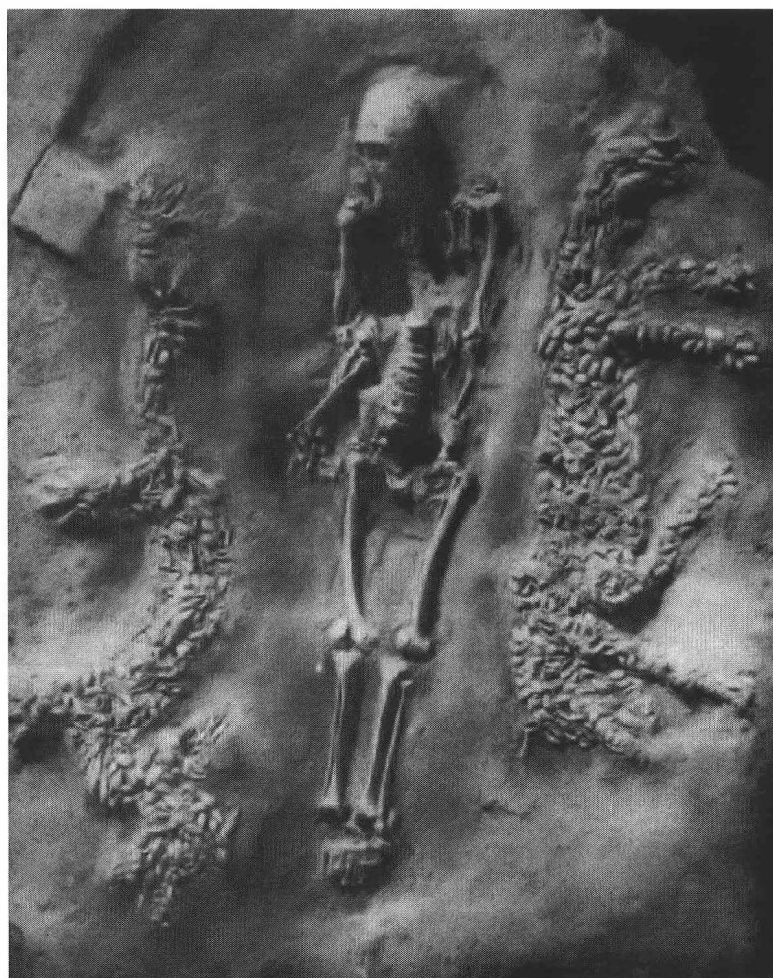


図5 漢陽西水坡遺跡「中華第一条龍」

(二) 畏怖の対象である虎と竜は、逆に味方に付ければこれに勝る存在は無いため、両者は一方で守護神としても扱われた。

(三) 仏教のナーガ説や虎の説話などが(一)(二)に流れ込むことで、竜や虎を従える「降竜伏虎」のモチーフが形成され、六朝から宋にかけて、さまざまな仏僧にこのイメージが付与された。

(四) 漢訳仏典『法住記』に見られる十六羅漢が、中国で二つ付加されて十八羅漢となった時、それが「降竜羅漢」と「伏虎羅漢」となり、最終的にこの両者で確定した。

上に幾つか補足すると、(一)は近世以降、『水滸伝』の「武松打虎」に集約されていくイメージであり、また(二)については河南省濮陽市の西水坡遺跡の、埋葬者の東西両脇に竜と虎を描いた新石器時代の例などがその代表格となる。図5がそうで、一般に「中華第一条竜」と呼ばれ、中国で発掘された竜の文物としては最古のものだが、この時からすでに竜は虎とセットなのである

*38。

(三)については、有名なのは『寒山子詩集』閻丘胤序に登場する、虎に跨がる唐の豊干であろう（と言っても、日本では一般に森鷗外の小説「寒山拾得」に依ってであろうが）。また、大英博物館(The British Museum)所蔵「行脚僧図」やギメ国立東洋美術館(Musée national des Arts asiatiques - Guimet)所蔵「宝勝如来図」などの「虎を連れた行脚僧」も、これが後世の玄奘三蔵のイメージに連なることも含め、よく知られたものとして挙げられる（虎皮の腰巻をしている孫悟空はその遠い子孫ということになる）。

なお、上記の研究は仏教の問題を中心に扱っているが、「降竜伏虎」の聖人は何も仏僧に限る訳ではない。そもそもが中国の在来思想をベースに成立した、仏教本来の教義からは離れたところに存在する聖人像なので、いわばどの宗教でも良いことになる。その点で、医術の側面が強調されたために道教や仏教といった枠組から外れてきた孫思邈は、まさにうってつけの人物であった。結果的に(三)の過程で従来の竜説話をもとに「降竜」が説かれるとともに、新たに「伏虎」のイメージが被せられることになったのだろう。

4. 虎との関わり

なお、冒頭に紹介した「孫思邈伏虎」は、単に孫思邈が虎を従えているというだけでなく、虎の怪我を治す「治虎」と、虎を乗り物としたという「騎虎」という、二つの要素が含まれることで成立している。「騎虎」については、明初の胡奎(1335～1409)の『斗南老人集』巻三「贈医士長律十首」の「龍蔵」に以下のようにある。

注 38…濮陽市文物管理委員会・濮陽市博物館・文物隊「濮陽西水坡遺址発掘簡報」、『華夏考古』1988年1期、1—4頁・24頁・113頁。

聞くところによると、むかし孫思邈は神竜に出会って不思議な薬方を授けられたという。ある夜、宝に満ちた竜宮が海中の蔵を開いたことで、千金の宝の秘伝が文章となって現れたのだ。秋の波濤のひろびろと果てしない様はきわまりが無く、天の川が輝きながら天を巡って夜の明かりとなる。城内に行くときは常に虎に跨がり、山童が（薬の入った）青い袋を持ってついて行く^{*39}。

注 39…昔年聞有孫思邈，曾遇神龍授異方。一夕珠宮開海藏，千金寶訣啟天章。波濤浩蕩秋無際，雲漢昭回夜有光。往往到城騎一虎，山童時復佩青囊。

注 40…道人指宮西北山，云是「聚虎坪」，坪下翠微庵，昔孫真人曾于此置貨藥。坪次有「西硤龍潭」，世云真人于此曾治病龍。

ここでは孫思邈の「騎虎」が既知の事実として書かれているので、これ以前にはすでに成立していると考えるのが妥当だろう。孫思邈はここでは完全に医師として捉えられているが、にもかかわらず「治虎」の要素はまだ登場しておらず、また「伏虎」「降竜」が両方とも提示されていて、「伏虎」に中心がある現在の王屋山の孫思邈像からはまだ隔たりがある。

同じく「伏虎」と「降竜」が併存する明代の資料として、成化二年（1466）の陳貴「游王屋山記」が挙げられる。

（案内してくれた）道士は、宮観の西北の山を指して「聚虎坪」と言った。また坪の下に翠微庵は、むかし孫真人がここに薬屋を置いたという。坪の次には「西硤竜潭」があり、孫真人がここで病気の竜を治したと伝えられる^{*40}。

上に言う「聚虎坪」は、恐らく冒頭に紹介した「虎嶺」と連結しており、この地名の存在の背後に孫思邈が虎を従えた話が存在するものと思われるが、ここで孫思邈が治しているのはやはり虎ではなく竜であり、この時点ではまだ『続仙伝』系の説話が行われているものと思われる。

なおこれは、孫思邈と王屋山の関わりを示す最初の資料でもある。王屋山は古来、多くの文人墨客が訪れ、さまざまな旅行記を書き残しているが、成化年間の陳貴以前には孫思邈に関する言及が無い。これは、医師としてのイメージが強くなり、「伏虎」と「降竜」の要素を獲得していた孫思邈が、かれの頃になって初めて王屋山と関連づけられたことを意味しているだろう。

ただ、実はこれはよく似たものが孫思邈の故郷である銅川市の孫真人祠にも存在する。雍正十三年序の『陝西通志』巻十三「耀州・五台山」に引く、清・康乃心の「五台山記」に以下のようにある^{*41}。

注 41…なお同文は清・畢沅の『閩中勝蹟圖志』巻二にも引用されている。

「五台蓋」は、徴士孫思邈の隠居した場所である。…「太元洞」は、険しい上に奥深く、どこまで続いているのか解らない。ここは真人が竜を治し、傷が癒えた後、竜が真人のために掘ったとも言われている。同官県（注・

現在の陝西省銅川市印台区)まで達していて、そこまでは40里から50里ほどある。その下は「聚虎坪」があり、真人が虎を伏した所である*42。

ここでは同じ「聚虎坪」という地名が見えるほか、竜を治したことまでもが共通している*43。同じ『陝西通志』の巻六十三「人物九・儒林」によれば、康乃心は陝西省郿陽の出身で、康熙三十八(1699)年の挙人だということから、この文もその頃に書かれたものだと考えれば、資料としては陳貴の王屋山の方が古い。ただ一方で、孫真人祠は明代の資料が無いため比較ができず、また先に見たようにここは王屋山のはるか以前から孫思邈を祀る廟となっている上、かれの墳墓まで存在していることを考えると*44、王屋山の方がこれを模した可能性もある。ただ、いずれが先であったとしても、孫思邈の「医者としてのイメージ」と「降竜伏虎」が外部から入り込んできて、それに合わせて地名も創作されたことは間違いない。

また孫思邈の「治虎」については、『太平広記』巻十四に引く『神仙拾遺』*45にある、晋の郭文挙の「伏虎」の話が元だと思われる。

郭文、字は文挙、洛陽の人である。『晋書』に伝がある。余杭の天柱山に隠棲し、大壁巖にも居した。太和真人が以前かれの石室に降って冲真の道を授けたが、山中に籠もって修行していたので、世の人々はかれのことを知らなかった。ある時、虎が口を開けて石室の前までやって来て、何かを伝えたいかのようにだった。郭文挙が手で虎の喉の中を探ると骨が刺さっていたので、取り除いてやった。翌日、虎は死んだ鹿を啜えてきて石室の外に置いた。これ以後、虎は郭文挙の周りに控え、おとなしく従うようになった。郭文挙が山を出る時、虎は必ず後に従った。街中で多くの人々のいる場所でも、虎はまるで羊や犬のように頭を下げて従い、粗暴な行動はしなかった。書物を虎の背中に乗せ、背負わせて行くこともあったし、郭文挙が木の実や竹の葉を採って、塩や米に換えに行く時は、入れた箱を虎が背負って従った*46。

郭文挙は晋代の著名な隠者で、中国の「伏虎」の聖人としては最初期の人物であるが、これが知名度の高い孫思邈に移植されたのだろう。孫思邈が獲得していた「医者」および「騎虎」の要素から、類似した性質を持つこの郭文挙の「治虎」が連想されて流れ込み、もともとあった「治竜」の方はストーリーが「抜き取られ」、相対的に地位が低下したと思われる。ただ、康乃心の「五台山記」ではまだ「治竜」が語られていることを考えると、「孫思邈伏虎」の成立は康熙年間以前とは思われない。恐らくかなり近年になってから語られるようになったものとするのが妥当であろう。

注42…曰五臺蓋、徵士孫思邈隱居地。…太元洞、巖崎幽渺、深不可測、或云：真人療龍、既愈、龍為穿此、達同官可四五十里。其下有聚虎坪、即真人伏虎處。

注43…なお孫真人祠自体がこの太元洞を祀る格好で作られており、洞窟が同官県まで続いているという言説と併せ、ここも背景に洞天説が存在していると思われる。土屋昌明「2010年夏期 第2回洞天調査の概要—嵩山・華山・終南山」(『洞天福地研究』第二号、2012年、3頁—20頁)、16頁を参照。

注44…順治十八(1661)年の「重修真人聖殿碑」に、「孫家原では、現地の人々が仙人の墓の後に祠を建立している(孫家原、土人建立祠宇於仙茔之後)」とある。この孫思邈の墓は文化大革命で破壊されたが、現在では修復されている(雷自申『孫思邈千金方研究』、30頁参照)。また孫思邈の墓は他にも山西省洪洞県南二十里の保長村にあり(雍正十二年序『山西通志』卷百七十二「陵墓・洪洞県」、清初には陝西・山西・河南の各地で墓が作られていたことが解る。

注45…前出『太平広記』、96頁—97頁。また同文が『三洞群仙録』卷四「郭文馴虎」にも見える。

注46…郭文、字文舉、洛陽人也。『晋書』有傳。隱餘杭天柱山、或居大壁巖。

太和真人曾降其室，授以冲真之道，晦跡潛修，世所不知。有虎張口至石室前，若有所告。文舉以手探虎喉中得骨，去之。明日，虎啣一死鹿致石室之外，自此虎常馴擾於左右，亦可撫而牽之。文舉出山，虎必隨焉。雖在城市眾人之中，虎俛首隨行，不敢肆暴，如羊犬耳。或以書策致其背上，亦負而行。文嘗採木實竹葉，以貨鹽米，置於筐中，虎負而隨之。

注 47…これには明代における懷慶藥菴の勃興も関わっているようである。程峰『懷商の歴史と文化』（河南人民出版社、2007 年）参照。この問題については稿を改めて検討する。

注 48…拙稿「天台山の済公信仰」、『洞天福地研究』第一号、2011 年、44 頁—62 頁。なお本文中でも触れた通り、「降竜伏虎」の系譜は最終的に「伏虎羅漢」と「降竜羅漢」に集約されたが、その生まれ変わりということで、二十世紀に入ってからその代表格となったのがこの済公活仏であった。

5. おわりに

最後に残るのは、なぜ孫思邈信仰がかなり時代を降ってから唐突に王屋山に入り込んできて、「孫思邈伏虎」のような説話が語られるようになったのかという問題である。

はじめにも触れた通り、王屋山は唐代に司馬承禎によって「第一大洞天」とされ、全国の洞天福地の首位に君臨する「道教聖地」としての地位を占めていた。しかし、それを支えていた唐代道教の枠組が消滅したことで、その後は「第一大洞天」の意味が本当には理解されなくなったものと思われる。ただ当然のことながら、王屋山自体はその後も人々に「聖地」を感じさせるだけの風格を保ちながら存在し続けている。そうした中で、王屋山の神聖性を表現するのに、「山には薬の材料が多い」といった素朴な観念が選ばれ、そこから「薬王」孫思邈が連想されたのではないだろうか^{*47}。そしてその中には幾つかの歴史的な層があり、まず初期の単純な「伏虎」の形象を保持しているのが小さな虎が侍る王屋山孫真人墳の神像で、また次の段階の「騎虎」の形象を持つのが王屋山陽台宮の神像であり、さらに最も遅れて成立した「治虎」の要素を語るのが王屋山の「孫思邈伏虎」説話だったのだろう。そうして段々と入り込んできた孫思邈伝説も、現在では全く別の「愚公移山」の舞台という言説に塗りつぶされている。すなわち王屋山という「聖地」に対する現代的な表現形式として、筆者が前稿で述べた済公活仏と天台山の関係と同じ構造をここに見て取ることができるのである^{*48}。

なお王屋山の道教説話は、孫思邈以外にも多数存在しており、それぞれに様々な問題を有しているが、本稿では取り上げることができなかった。これについては、また稿を改めて検討したいと思う。